

茶道の所作

社会学的考察

中西 晴子

〔抄 録〕

茶道とは何かという問いに答えるためには多くの方法がある。文化としての茶道、芸術としての茶道、礼儀作法の一つとしての茶道、遊びとしての茶道などがそれぞれある。ここでは茶道を所作という点にしばって社会学的に考察したい。なぜ所作に注目するかというと、茶道はまず茶を点て、それを飲むという行為から始まるからであり、茶会はこのような行為を重視する人々が集まって行う社会的・社交的な行為であるといえるからである。このような社会性・社交性に重点を置く場合、茶道を社会学的に考察することは自然であり、そこから茶道を見ることも新しい茶道の見方に通じるのではないかと考える。まず「飲む」という行為は生活のなかで一般的であり、普通の行為である。茶を「飲む」という行為も生理的な渇きを潤す行為である。つまり、茶と飲むという行為は、日常的であり生理的な欲求を満たす行為である。しかし茶の湯の点前で「飲む」という行為は、単に生理的欲求を満たすものではない。それは文化的、社交的な行為である。

ではどのような点で文化的、社交的なのか。そのことを所作という動きを通して論じたい。

キーワード：曲尺割（カネワリ）、時間、音、間、社交性

1. はじめに

この論文は茶道の行為、つまり所作を社会学的に考察することを目的とする。茶道を習うものにとっては、所作という言葉は自明のことと思われる。所作は日常生活のなかにおいて、以前は身のこなしのことをさしていた。かつては「その所作はなっていない」という言い方を耳にしたことがある。

では所作とは何であろうか。広辞苑によると次のように説明されている。まず最初に仏教で

いう「身・口・意の三業を能作というのに対して、その発動した結果の動作・行為をいう。転じて、読経・念仏など」と説明し、第二に「仕事。生業。」第三に「しわざ。ふるまい。身のこなし。」第四に「おどり。手おどり。」第五に「所作事の略。」とある。このように所作の説明は多岐にわたっているが、『茶道辞典』（桑田忠親編）には茶道の所作そのものには触れていない。しかし茶道のバイブルといわれている『南方録』に「露地ニテ亭主ノ初ノ所作ニ水ヲ運び」（『新修茶道全集』巻九 文献編 下「南方録」3頁、春秋社 昭和31年）とあり、茶をずる人の行為を述べていると解釈できる。

ところで人間の行為が文化をつくり、また文化の中で行為が展開する。両者は相互に関連し補完的である。茶道の行為の場合も『南方録』に書かれているように、所作によって茶道という文化はつくられた。このことは茶道がつくられた文化であり、それに人々が参加して文化をつくりあげるということになる。しかしこの茶道という文化の中ではじめて喫茶の行為が行われるのである。

この小論で茶道における所作とは何かを考察するとき、社会学の行為論を手がかりに行うことができるであろう。

周知のようにM. ウェーバーは社会的行為を分類している。すなわち合理的行為と非合理的行為である。前者は 目的合理的行為、 価値合理的行為、後者は 感情的あるいは情緒的行為、 伝統的行為に分けられる。

所作は「曲尺割（カネワリ）」にもとづいて行うことから、 の目的合理的行為といえるだろう。しかしまた所作は の価値合理的行為でもある。茶道の根本精神として「第一仏法ヲ以テ修業得度スル事也」（『南方録』 覚書 3頁）ということが述べられているのはそれを物語る。さらに茶事では道具をふくめ総合芸術性を主客で認め合う行為といえるであろう。 の感情的あるいは情緒的行為とは、美しい、おいしい、などの美的価値と関連し、またそれをつくりだす行為、あるいは共感しあう行為といえる。 の伝統的行為は、利休が『南方録』に伝えた所作を現在も私たちが伝承する行為である。そして茶道の所作はこれら四つをすべてに関わりあるものであり、それらを総合する行為といえる。

まず最初に茶道の行為は一定のきまり、つまり「曲尺割（カネワリ）」という規矩にしたがって行われている。また、規矩にしたがうという行為は利休がその所作を定めたときと同じ形、同じ手順で行われている伝統的・伝承的行為でもある。このことは所作を頭だけでなく身体的に覚える経験的学習とそれを蓄積する学習でもある。所作は「カネワリ」という伝統的な所作を学習するだけでなく、カネハズシという創造的行為もあり、それらは茶会を構成する人々の間で展開することになる。所作が単に受け身的な行為でなく能動的な行為であることを意味する。

第二に所作は技能的な行為であり、知的な認識行為である。またそれは茶道の伝統的な所作を知的に理解した上で、日々修行を重ねることにより習得できる技能である。たとえば茶会に

おける道具の取り扱い、道具自体を認識する行為と所作という技を使った結果生じるものであり、それぞれが分離、独立したものでない。すなわち所作は、知と技の両面が相互に働くことであり、それが茶会を成り立たせている。このことから所作を行為論として考察するためには、知的側面と技能的側面の両面から接近する必要がある。

第三には、所作は先に考察したように茶の道を知ることによって成立する行為であるが、茶を飲むことは「喉を潤す」という本能的行為に一定の規則を加え、その結果芸術的な意味付与を生み出す行為である。生活文化としての最初の原点は、飲食である。飲食の中でも特に『飲む』という行為に文化的意味を付与したものである。茶道の行為では、所作の精神的な意味、審美的な意味が問題になる。

第四には所作の社会性、社交性である。他者と共に「一碗の茶」を飲むことが何よりも重視される。それが茶道の成立要因の原点でもある。さらに「一碗の茶」を他者においしく飲んでいただくために、より美しい所作をする。また茶室という空間において客、つまり他者に満足してもらうためだけに気遣をし、和やかになるように心を使うのである。これを表現できるのが茶道の所作であり、それを他者との相互行為において可能である点で、社交性といえる。

2. 所作を規定するもの

茶道において所作を規定する根本は、「曲尺割」(カネワリ)とよばれるものである。このカネワリについては、『南方録』大奥秘墨引書の冒頭に「書院台子草庵ニ至ル迄カネワリノ数ヲ定ムル事根本、」と記され、その先で「真ノ書院台子ハ格式法式ノ厳重ニ調ヘル世間法ナリ。草ノ小座敷、露地ノ一風八、本式ノカネヲ本トスルトイヘドモ」とある。このことは「真の書院台子の茶はその式法を厳重に定めた世俗の法である。草庵の小座敷、露地の茶風は本格のかねを基本とする」(新修茶道全集<増巻>九 文献編下『南方録』墨引書 119頁 編集桑田忠親 昭和31年 春秋社)とあるように、茶道具の数、配置のきまりをいっている。この後にカネワリに準じて道具を置く方法や炉の寸法をカネワリにより決めたことを記す部分がある。さらに後で説明するカネハズシについても「名物ハ峰スリニ置キ」と書かれている。カネハズシについては、後で言及したい。

つまり、茶道の所作はカネワリにより規定されている。このカネワリにより習得した所作により一碗の茶は点てられ、客もまた決められた規則をつかいながら一服の茶をいただく。このことはカネワリを理解する人々による茶のゲマインシャフトを形成しているといえる。言い換えれば所作により形成される食卓共同体ともいえる。

このことはM. ウェーバーが『古代ユダヤ教』の中で「飲食を共にする」という食卓共同体が集団に入れるか否かを決定するメルクマールとなると述べていることに関連する。この食卓共同体の場となるのが茶室であり、この空間において主客は一碗の茶のために、それぞれの役割

を遂行していく。ここでの主や客の所作のやりとりは、時間で計るのではなく、音と間によって進められる。このことについては後で触れたい。

さて先に所作はカネワリに定められていると述べたが、このことについて次の点を付け加えたい。つまり、茶道の所作は点前という形で進められる。それは手の運びや身体動作であり、さらに人と人との応対がある。前者は点前作法で後者は儀礼に該当すると考えられる。前者がカネワリにより規定されていることについてはすでに述べた。後者の儀礼も所作を規定する重要なものの一つである。

茶道における儀礼の仕方の多くは、日常生活の中に残っている。しかし、現代の人々でその礼が真の礼であり、行の礼であり、草の礼であると知っている人はわずかであろう。茶道でこのことを日常的に使い分けている。前者で隣人との朝夕の挨拶に、深々と腰を曲げることはないのである。後者のそれは茶室に入退室するとき、両手を畳にしっかりとつけて額と畳が平行になるくらいまで腰を折る。これを真の礼という。茶室では日常的にこの礼が使われ、点前作法の一つに入っており、規定されている所作である。しかし、日本人の多くは日常生活の中でこれを意識せずに使っている。この点についてシュッツは「日常生活の世界」として次のように捉えている。

「＜日常生活の世界＞とは、われわれが生まれるはるか以前から存在し、他の人々、つまり、われわれの先祖達によって秩序ある世界として経験され解釈されてきた間主観的な世界であり、

＜手もちの知識＞という、つまりわれわれ自身の経験やわれわれが両親や教師から受けた経験にもとづいている。われわれは日常生活においては常に蓄積された手もちの知識というものをもっており、こうした蓄積された知識は、それに固有な歴史をもっている」と述べている。（『現象学的社会学』A. シュッツ、森川眞規雄、浜日出夫訳、紀伊国屋書店 1980年発行 28頁）

さてこの点からすると、こんにちは、よろしく願います、さようなら、という日常生活の挨拶はシュッツのいう手もちの知識であり、点前作法の儀礼はその点前に準じて覚えていく点から蓄積されていく知識といえるであろう。

つまり点前には薄茶と濃い茶、風呂と炉、その炉の切り方は本勝手、逆勝手に合わせて八つの切り方があり、薄茶と濃い茶の点前だけでも18種類になる。これに棚のあるとき、ないときなどで、所作の種類は多くなる。また季節の趣を加えるなど茶道の点前（つり釜・中置き）¹⁾は、点前の種類と炉の切り方、風呂などの種類を所作により総合させ、蓄積させていく知識でもある。

3．所作の知的側面と技能的側面

「喉の渇きをいやす」という動物の本能的な行為に、「飲む」ための行為をルーティン化させ

たのが茶道である。喫茶という行為は、食物摂取という動物の本能的行為に文化的な要素を加えたもので、生命の生存という第一義的要素にくらべると副次的なものといえる。しかし茶道という喫茶行為の原点には、点前とよばれるものを順序よく覚えるだけのものではなく、文化的・芸術的、社交的要素も含まれている。

ところで喫茶行為と表現するが、喫茶行動とは言わない。社会学小辞典には、行為は「行動がシンボルによって媒介された意味的なものである場合、それを行為と呼ぶ」（『同掲書』101頁）とあり、行動については「生体のひき起こす反応あるいは変化全般についての用語」（『同掲書』108頁）とある。以上の説明から行為は「意味的なもの」である。このことは茶道の行為、つまり所作を意味的なものということができる。所作をくりかえし練習することから、蓄積されていく知識ともいえる。

先で述べたが、シュツツのいう蓄積された行為というのは、自分自身の経験や教えられた経験にもとづいて蓄積された知識のことである。この点から言えば茶道の所作は一つの点前を習得し、次の点前を習得することである。それは蓄積し、構築していく知識であり、知的側面をさすのである。

所作がカネワリにより規定されていることはすでに述べたが、カネハズシも『南方録』において言及されている。それは「カネニアテ、一ツ物ヲ真中ニ置事、大法ノ通也。サレトモ眞銚ニアタルヲ嫌フ事也。銚ハツシトテ少心モチニ銚ヲハツス也。大秘事也。」（『前掲書』135頁）とあり、このことは名物を真ん中に置くことは大法通りである。しかし、真ん中に置くのはよくないので心持ち中心をはずすことを銚ハズシといっている。銚ハズシは左右対称的なシンメトリーをさけ、日本人の美意識とされている不均衡の美の原型であると考えられる。この銚ハズシ、つまりカネハズシは『南方録』において言及されているが、微妙なハズシ方は、理屈ではなく鍛錬により身体で覚えるものである。つまり技術の伝達方法でもある。

社会学の分野では倉橋教授が『科学技術と生活文化』（社会学論集第32号、佛教大学1999年発行）において、科学技術と文化の関係を論じておられる。

そこでは人の手の延長物である道具を人間は生きるために手段として使い、技術を生み出した。そして人間は技術という文化を形成し、蓄積し、伝播させ、変化させてきた。そして技術はわれわれの生活の文化として重要な意味を担うことを述べられている。

さて道具は物をつくる手段である。そして道具を使うことによりさらに高度な物をつくった。このことにより人間は道具に働かされたり、考えさせられたりするまでになった。この科学技術の分野でコンピューターという高度な道具を作り出したことは知的側面であるが、これを操作させることは、技術を習得するという技術的、技能的側面ということになるであろう。

茶道においては、手で茶道具を使うことにより所作が表現できる。これは先で述べた手の延長物が茶道具であるからである。たとえば、袱紗さばきは両手で袱紗をあつかい、棗をふくときは、さばいた袱紗を右手に、左手に棗を持ちふく。このような動作は四百年前から行われて

いる伝統的な技能である。日々の鍛錬によりぎこちない動きから、より洗練された点前を習得することが所作の技術的、技能的な側面と考えられる。またそれは精神的・審美的な意味も持っているのである。

4．所作の精神的意味、審美的意味

ここで所作の精神的意味と審美的意味について言及するために、まず茶の原点をどこにおくかを述べる必要がある。それらの意味は歴史的に形づけられたものである。茶の出発点は中国であり、その様式を日本に持ち帰ったのは道元である。日本の茶の所作の起源は村田珠光あるいは武野紹鷗、千利休と言われているが、ここでは茶の所作をおこなう茶室を原点にし、茶道という日本固有の文化の存在を前提として述べていきたい。

茶道は単なる娯楽ではないことは、それが成立した経緯からも明白である。それは『南方録』覚書に「小座敷ノ茶ノ湯ハ、第一仏法ヲ以テ修業得道スル事也」(『前掲書』3頁)とある。さらに禅の修行と茶の結びつきを知る手がかりは『永平清規 赴粥飯法(ふしゆくはんほう)』(西嶋 和夫著 金沢文庫 1992年発行)にも記されている。それは「展鉢ノ法。先ズ合掌シ、盃盂(ほう)ノ複帔(ふくはく)ノ結ビヲ解イテ、鉢拭(はつしき)ヲ取り襷疊(へきじょう)シテ小ナラシメヨ。所謂小ナラシムトハ、横二一半二折り、豎(たて)二三重二折ツテ、横二頭鑢(ずぶん)ノ後二安ジ、稍匙筋袋(ひじょたい)二等シウス。」(『前掲書』75頁 修士論文引用文献)とあり、この箇所「小ナラシム」が袱紗捌きとも解釈できる。つまり寺院に参禅した茶湯者により点前の一つになったと考えられる。

ところで茶道には根本に宗教、特に禅の教えと同じ、心の目をやしない、礼法を重視する側面がある。茶の玄人とよばれる人は、茶道の師匠の家にあって日常的な部分と非日常的な部分の両方に身をもって仕え師匠の一挙一動足を習得し、心からも会得する。それは点前をするための準備にはじまる。当たり前のことであるが掃除もその一つである。そのことは次の逸話として残っている。「利休がある茶会に招かれた時のことである。その日は風が強く、露地に入っていくと柿の落葉が散りつもり、行く道々の地面がまるで山里の中にいるような景色であった。利休は、「なかなかおもしろい風情である。しかし、亭主はこの葉をきっと掃き捨てるに違いない。」と思いながら、中立ちに茶室を出ると、やはりすっかり掃き清められて、一つの落葉も見られなかった。利休は、「露地の掃除というものは、朝、客が来るときは宵のうちに掃き、昼に客が来るときは、朝掃き清める。その後はいくら落葉が積もっても、そのままにしておいた方が、風情があつてよいものを」と、連客に話したということである。」(『茶の本』岡倉天心著 第四章 58頁 講談社学術文庫)このことは日常生活での掃除であれば、落ち葉が一枚も落ちていない掃除の仕方は丁寧と思えるが、そこに落葉が自然にあるという風流の心、心の余裕も学ぶことをいっている。つまり茶の玄人と一般の茶人との違いは、修業をどのように自分の経

験とするのかにつながるであろう。

しかし、歴史上遊びの茶が成立していたことも事実である。それは茶合わせといわれるもので、平安以来の物合わせとよばれるものである。谷川徹三氏が『茶の美学』において、茶合わせとは「平安以来の物合わせの系譜に属する社交の遊びで、これを中国風に闘茶とも呼び」（『同掲書』22頁）と述べている。闘茶とは足利時代の初期に、武士階級の間で流行した茶の産地を当てる遊びの茶のことである。

茶道の審美性については、岡倉天心が『茶の本』において審美主義的な宗教にまでなったとまで述べている。また谷川氏はその著書『茶の美学』において「身体の所作を媒介とする演出の芸術としての茶」（9頁）と述べているように、茶道の行為は所作により表現される日本固有の文化の一つである。しかし能や演劇、舞踊と異なるのは、観客であるはずの客も演技者の一人になる点である。

同氏は「茶の湯ははっきり舞踊や演劇と区別される」（19頁）といい、さらに芸術的隔離性と述べている。茶道そのものを他の世界から区別している。このことから所作の審美性、芸術性を問うことができる。

茶道の所作の審美性は時計で計ったものではなく、間とよばれる日本文化独特の時間で表現できる。そこで、次に所作の間について触れたい。

日本の文化にはこの間を大切にする芸術が多くある。能もその中の一つであるが、能の舞台は幕がない。その舞台は対話を演じる空間であるが、その空間はある時は浜辺であったり、野山であったりする。舞台の空間を相手と間を使うことにより演じるのである。西洋のオペラには指揮者がいるが、能の囃子方の前には指揮者はない。すべて演技者と囃子方との間により進められる芸術である。

さて茶道は茶室に集う主と客が、一碗の茶を介して相互に結びあい、茶室（空間）と時（時間）を共有する芸術である。そして茶会は、音と無（間）とにより進行する。間は茶道の伝統文化を知っている人が伝承し、創造する。そのことを理解している主と客が、茶室という場で相互にくりかえす所作により創り出されるのである。茶会の始まりの音は、茶室にひびく微かな釜の音とそれに加わる亭主の襖を開ける音であろう。そしてつづく音は、柄杓を蓋置におくコツツンという音である。この音を聞き主客の総礼（濃い茶のとき）がある。袱紗を捌く音、茶碗に茶杓を打つ音、茶筌通しの音、釜に湯を返す音、これらをつなぐのが所作であり、所作をうながすのも音である。

この間はまた所作を美しく見せるという役割も担っている。たとえば袱紗を扱う所作を袱紗さばきといい、茶杓、茶入れなどの茶道具を清め拭うのに用いる。このさばく所作を美しく見せるには、適当な間と構えと手の動きがうまく兼ね合っていなければならない。そうでないと所作の審美性を生み出すことができない。

5．所作の社交性

『南方録』に、茶道は他者と共に茶を飲むことを前提として行為していることを明確にしている箇所がある。それは覚書の「水ヲ運ヒ薪ヲトリ、湯ヲ沸シ茶ヲタテテ、仏ニソナヘ、人ニモホドコシ、吾モノム、」（『南坊録』覚書 新修茶道全集 巻九 文献編・下、3頁 春秋社昭和31年 修士論文 引用文献）という箇所である。このことは第一にそれが宗教的・信仰的な行為であること、第二に対人的な相互行為であることを明示している。人が他者との相互行為を交わす場は社会においてであるが、人間は社会において価値・規範（茶道の場合仏に供えということ）を内面化させるのである。

茶に参加する人は茶室を一つの社会とみなし、所作という点前の規範を身につける。亭主と客の最初の相互行為は挨拶で始まる。挨拶は他者を認識するための一般的な行為といえる。茶道は認識行為に一定の規矩をもたせ、儀礼を特に重んじる。

青木 保氏は『儀礼の象徴性』において、「近代化＝合理化の影響は、宗教自体の衰退をまねくことになった。しかし、儀礼は残った。」（『同掲書』p.5）と述べている。このことについては、M.ウェーバーは西洋における近代社会の成立の本質を、生活諸領域全般にわたる高度な合理化に求め、人類の歴史を合理化（世界の呪術からの解放）という視点から分析している。

儀礼と宗教儀式を切り離すことはできないであろう。現代社会には多くの通過儀礼が残っている。しかし、通過儀礼は非日常的である。その理由は、それが行われる時や場所が日常的でないからであろう。

一方一般的に茶会は社交性を重視する傾向にある。茶会は茶の精神を十分に理解している玄人とよばれる人だけでなく、飲み方を知っている程度の素人茶人が参加する大寄席の茶会がある。特に名の知れた玄人茶人の席（家元・内弟子・業跡など）¹⁾には、貴重な茶道具を見たい人、またその茶会に同席したい人が大勢いる。これは限定された茶会に同席するという社交性をあらわしている。

茶会での他者の認識はあいさつであり、ここでは儀礼が繰り返される。これに比べると「おはよう」、「こんにちは」、「さようなら」などのあいさつは、他者理解の一つである。この言葉と共に頭を下げる、腰を曲げる、両手を前に上腿を曲げるなどは、他者の一部をみて自分も反応する行為である。これは他者の身体の一部が自分に取り込まれる。あるいは自己と他者が身体を通して一本の糸のように感じられる他者理解ということができる。

先で述べた身体を使い他者に意志を伝える方法の礼を儀礼とみない説がある。では礼と儀礼の差はどこでみるのであろうか。

広辞苑に、礼は1) 社会の秩序を保つための生活規範の総称。儀式作法・制度・文物などを含み、儒教では最も重要な道徳的観念として「礼記（らいき）」などに説く。2) うやまって拝すること、おじぎ、拝礼とある。儀礼については礼儀、礼式とあり、礼式については礼意を表

す作法とある。

『新社会辞典』（編集代表 森岡清美、塩原 勉、本間康平 有斐閣 1993年）に礼はない。儀礼について、「ある特定状況下で固有の秩序だった様式をもつ人間行動のこと。デュルケムは、聖＝俗の領域を凍結し社会の統合を促進する側面を強調し、ファン・ヘネップは、ある状態や身分が別のものに变化する儀礼、特に通過儀礼に注目して分離 移行 合体の三局面からなる構造を明確化した。」とある。（316頁）

またサムナーは『フォークウェイズ』において儀礼を「欲求を充足しようとする努力から生まれた個人の習慣であり、それがその個人が所属している集団の成員も同じ方法をとることによって社会的習慣になったものをいう。」（『新社会学辞典』1251頁）と記載されている。茶道はカネワリという規範を茶人が守り、伝承することにより、四百年の時空を超えて受け継がれている。これは茶を行う集団の中で、個人がカネワリという規範を守る茶のフォークウェイズということになるであろう。

『文化人類学事典』には儀礼についてリーチ、ムーア、マイヤーホフ、タムハイア、ゴフマン、レヴィ＝ストロース、バイトソン、エリアーデなどの説を紹介している。ここではムーアとマイヤーホフが儀礼の特徴を述べた説の紹介を参考にして茶道における所作の儀礼性を考えると、それは1) 繰り返し、演じられる行為であり、2) 特別の行動、スタイルをもつ行動であること、さらに3) 秩序をもち、4) 喚起的な表現形式を有し、5) 集合的・社会的意味が存在することを指摘できるであろう。（弘文堂 昭和62年 213頁）

1) の繰り返し演じられるという点は、所作が連続的に行われる行為であるということに通じる。それは歴史的には利休以来の所作の繰り返し、連続性という点からいえるが、ある茶会が成立するのはそれに加わる人々の所作の繰り返しによるという意味からいえる。つまり所作は歴史的に、また時間的に連続することによって成立する。しかし茶会は連続しながら非連続的でもある。茶会において亭主の茶を点てるという所作と、客がそれをいただくという行為とではその役割が異なり、亭主は亭主の、客は客の所作として相互に独立している。したがって所作は不連続的である。また甲という茶会と乙という茶会は同じ所作の繰り返しによって成立することは事実であるが、甲と乙は時間的・空間的・人的にもそれぞれ独自の、個別的な所作であるという点で非連続的である。しかし主客の所作の不連続性がなければ茶会の成立はなく、茶会の所作は連続性と不連続性の結合の繰り返しによって成り立っているということができよう。たとえば、亭主が茶を点ててへり外に出すことで亭主の所作の連続性はとぎれる。客は茶をいただき、茶碗を拝見し元の場に茶碗を返すことにより、客の所作はとぎれる。次に亭主が茶碗を取り込むという行為により亭主の所作は連続をはじめる。これは亭主、客の所作が連続、不連続の繰り返しを行いながら、茶会を成立させているのである。

2) に関していえば、茶会の所作は特別のスタイルを持っている。それはたしかに喫茶という点で日常茶飯の行為であるが、茶室における所作は日常的な喫茶でなく特別の形式と意味を

もつ行為である点で儀礼的であり、またその非日常性を創造するという意味で儀礼的であるといえる。

3) の秩序をもつという点は、茶道の所作が単に茶を点て、飲むのではなく秩序に則した行為として行われることからいえる。それは一定の基準、つまりカネワリに即して行われるという意味で常に秩序を予想しているのである。そこには茶を点て、喫するという行為が単に形式的、合理的に理路整然とした行為であるだけでなく、所作が美しく、審美的な秩序を守り、かつそれを作りあげていく儀礼であるという点で秩序的であるといえる。

4) 喚起的な表現という側面は所作が先に指摘した特別なスタイルを有するという点につながる。しかしそれが喚起的か否かは、それを見る人々、あえていえば第三者からそのように感じられ、思われるわけであるから、茶道仲間、茶道を知る人々、それに関わる人々にとっては喚起的ではなく日常的な行為であるといえよう。

5) の集合的・社会的な意味は茶会が社交性を求め、主客の間で展開される行為であるという意味から当然いえることである。

ところで『茶道辞典』には儀礼としての所作に関する記載がない。筒井紘一氏が『茶の湯事始』³⁾において「儀礼」という表現をしている。また茶を習うものは「礼儀」とか「礼儀作法」といういい方をしている。

だが礼とか儀礼の差は、場所、つまり空間ではないかと私は考えている。先でも述べた宮参りの通過儀礼であるが、これは神社の神殿という非日常的な空間の中で行われる。茶道もまた茶室という非日常的な空間で行われる。そこで一碗の茶のために主客が相互に真・行・草の礼を交わすのである。つまり点前作法の所作の一つ一つが儀礼である。さらに他者との最初の行為は中門にての迎え礼による所作であり、最後の所作も茶室より庭に出てする送り礼である。

今述べたように、茶道の所作の始まりは礼であるが、亭主が一人の客のために一服の茶を点てるための行為の始まりは、客という他者を想定したときからであろう。このときから茶会の日と客のことだけを考えて準備をするのである。茶会の日のために室内や露地の点検をし、道具の組み合わせの準備を進めるのである。これらの行為はすでに社交性を前提としている。この点から茶会の社交性は、茶事の案内状を出した時から始まっていると解釈できる。

茶会には、招く人を初めから決めている茶事形式のものと、不特定多数の人が席入りできる大寄の茶会がある。前者は茶を知っている仲間や、目利きといわれる玄人の集まりである。後者には目利きの玄人と、茶をまったく知らない素人が同席する。このとき隣の相席の人に、いろいろ教わりつつ一服をいただくのも社交性のあり方の一つである。あるいはこのような模倣行為によって茶の社交性を学ぶのである。このことが茶道入門のきっかけになる場合も多い。

では非社交性は存在するのであろうか。茶室に集うということだけで社交性は成立する。亭主は客を中門にて無言のあいさつを交わし、客が見えなくなるまで見送ったあと、静かに茶室にもどり炉前に独り座し、独り服する。それは自分のためだけの点前である。この一服は非社

交性ではないかと考えられる。しかし、すでに述べたように茶を点てる精神のなかに「仏にそなえ、人にもほどこし、吾ものむ」とあるように、常に他者に対する思いやりがあるという点から考えれば、独り服するときも社会的な意味が存在するのではないかと判断する。

む す び

茶道の所作は日常の生活と密接に関係している点で日常的である。しかし、茶室という空間において行う動き、儀礼などの行為は非日常的なものである。この茶を飲むということは、生理的欲求を満たすことである。

ところで茶道において、茶を点て、喫茶するという行為は、生理的な次元にとどまらない行為である。その行為は文化的な意味をもっている。禅を中心とした宗教的意味がそれを物語る。

次に茶室における喫茶行為は主客という人間関係を形成し、それを継続させるという点で社会的である。社会的にはこの社交性が特に重要な意味をもっている。

さらに茶道の喫茶という行為は、美的である。いいかえれば、審美性を探求する行為である。それには、茶室、道具、露地などの芸術的意味も含まれる。しかし、重要なのは、美的価値を理解し、共感する人々の存在である。

茶を喫する人々は、このような美的感性を共有する共同体を形成し、それを発展させる人々であるといえよう。茶道はこれらの諸要素を総合する芸術であり、それを支えるのは所作を行う人々である。

以上茶道の所作を中心に考察してきたが、結論的には、茶道を支える基本は所作そのものであり、それを行う人々であるといえる。したがって所作を抜きにしては茶道は理解できない。しかし、いままでは所作の仕方、その習得が主であり、なぜ所作が茶道において重要であるかという点に関する理解は浅かったといえよう。その重要性は茶道は自由勝手な行為でなく、カネワリという一定の規範に基づいて行われる行為であるからである。そしてその規範は宗教的であり、またその行為は審美的であり、知的、技能的、社会的であるという多くの側面を持っているからである。したがって所作という点からそれぞれの側面を照射することが可能である。その作業は今後の課題に残すこととし、ここでは所作がその中心的意味を有するという点を社会学的に明らかにしようとしたのである。

〔引用文献〕

- (1) * 釣釜（炉の中に五徳を廃して、釜を鎖または天井からつる釜をいう。）『茶道用語集』153頁 井口海仙編 淡交社
- * 中置（風炉点前の時、風炉を道具置の中央に据えることをいう。）『茶道辞典』450頁

(2) 業跡(ぎょうてい)『茶道辞典』桑田忠親 編 東京堂出版 195頁

一家の業を引継ぐという意味から転じて、茶道の家元で修業する者、内弟子のことをいう。裏千家の他では余りこの呼称を用いない。

(3) 『茶の湯事始』(講談社学術文庫 112頁)

「茶が禅院の作法に取り入れられ、一定の儀礼としての「茶法」が成り立っていた過程は」、「これは何も住持の日用の作法に限ったものではなく、あらゆる儀礼の場でみられる行法である」と書かれている。

【参考文献】

(1) 倉橋重文『社会学点描』晃洋書房 1994年

(2) 山村賢明『茶の構造』世織書房 1996年

(3) 湯浅慎一『身体の現象学』世界書院 1986年

(4) 見田宗介 共著『時間と空間の社会学』岩波書店 1996年

(5) 和辻哲郎『人間の学としての倫理学』岩波書店 1934年

(なかにし はるこ 社会学研究科社会学専攻修士課程修了)

(指導教授：倉橋 重史教授)

2002年10月16日受理